

研究機関名：東北大学

1.受付番号	2023-007
2.研究課題名	AYA がん患者との End-of-Life ディスカッションに関する研究
3.研究期間	令和 5 年 9 月（倫理審査委員会承認後）～ 令和 6 年 3 月 31 日
4.研究の概要	意義・目的（研究の背景・目的や倫理的項目についての確に記すこと。） 近年我が国のがん対策において、思春期・若年成人（Adolescents and Young adults; AYA）世代への支援が重要課題のひとつとして取り上げられている。米小児科学会や WHO は AYA 患者が発達的、情緒的に準備ができていない場合には、治療に関する意思決定に可能な限り参加させることを推奨している（American Academy of Pediatrics, 2000; McGrath, 1996）。また、AYA 世代の患者は、治療に関する話し合いに参加する能力を有し、また患者もそれを望んでいることが報告されている（Lyon et al., 2004）。また昨今、終末期（End-of-Life; EOL）の治療や療養に関わる多様な意思決定を視野にいれ、病状や予後、治療の選択肢、治療目標等について、早期から話し合いをすることの重要性が指摘されている（Peppercorn et al., 2011）。しかし小児科医を対象とした国内の調査においては、高校生に対して EOL に関する話をすべきであると回答した対象者が 9 割を超えていたのに対し、実際に根治不能であることを伝えている医師は 4 割弱、死が近いことを伝えている医師は 2 割強にとどまっていることが明らかとなった（Yoshida et al., 2018）。 このように若年のがん患者との EOL に関するディスカッションは多くの課題を残しており、患者や家族の意思決定を支える上でも、医療者の困難感を低減するためにも、指針の確立が期待されると考えられる。そこで本研究では、AYA 世代がん患者の中でも特に年齢の低い患者層（15～24 歳）との EOL ディスカッションの実態、および EOL ディスカッションに関する医療者が認識する阻害・促進要因や困難感について明らかにし、今後の体制整備のための基礎的資料を提供することを目的とする。 方法（研究に必要な対象者人数、年齢構成、性別、および対象者を選ぶ方針・基準も記すこと） 1 時間半から 2 時間程度のフォーカスグループインタビューを実施する。事前に作成したインタビューガイドに定める調査項目に沿って半構造化面接を実施する。なお、対象者の回答の内容に応じ、適宜追加の質問を行うこととする。 調査は原則として、zoom を用いたオンラインでの実施とする。ただし対象者が対面での実施を希望する場合、対象者にとってアクセスの良い病院内または近隣の貸し会議室等における対面での実施も可能とする。

	本研究では 15～24 歳のがん患者に関わる医療者を対象とする。 適格基準は以下のとおりとする。 ① がん患者の診療・ケア・相談支援に従事する医師（治療医）、看護師、社会福祉士、心理職のいずれかであること ② 15～24 歳のがん患者に関わる経験が年間 2 例以上あること ③ 終末期の 15～24 歳のがん患者に関わった経験が過去 2 例以上あること 当該年代のがん患者の診療数の多い施設に協力依頼を行い、適格基準を満たす医療者をリクルートする。1 施設あたりの対象者は、各職種 1 または 2 名とし、研究全体での予定対象者数は①医師、②看護師、③社会福祉士または心理職の各職種区分について、それぞれ 5～10 名とする。 問い合わせ・苦情等の窓口（講座・研究室の連絡先を記入し、研究者の個人名は記入しないこと） 教育心理学講座 臨床心理学分野：022-795-6140
--	--

（紙面が不足するときには、罫線の縦幅を任意に増やし、次頁送りにしてください。）